

むかし。

常山という山に、きこりが四人登って、木を切っていました。きこりたちは、山小屋に泊まって、何日もかけて仕事をしていました。

一日の仕事が終わって、山小屋で夕ご飯を食べてしゃべっているとき、だれかが、「なあ、おまえたち、おれたちは仲良く働いているが、どうも四人というのは縁起が悪い。四は死人と聞こえる」といい出しました。そこで、

「それじゃ、町に行って、仲間をひとり連れてきたらどうだろう」と、だれかがいいました。

「そういつてもなあ、ひとり仲間を連れて来るのは簡単なことじゃないぞ。人形を作ったらどうか」と、いちばん年寄りがいいました。

「うん、それはいいぞ。それがいい」と、きこりたちは賛成しました。

みんなは、わらで、きこりと同じくらいの大きさの人形を作りました。そして、人形に名前をつけようということになりました。太郎はどうか、三郎はどうかといひ合っていました。が、いちばん年下のきこりが、

「ここは常山だから、常山小僧とよんだらどうだろう」といいました。ほかの三人も、

「常山小僧か、そいつはいい名前だ。常山小僧がいい」といいました。

きこりたちは、朝起きると、

「常山小僧、おはよう」といって、ご飯ができるよ、

「おい、常山小僧、飯ができたぞ」といって、ご飯を人形の前に置きました。

仕事に出るときには、

「常山小僧、行って来るぞ。留守番たのむ」といって、出かけました。

仕事が終わってもどって来ると、

「常山小僧、今帰ったぞ」といって、常山小僧の肩をぼんぼんとたたきました。きこりたちは、わら人形の常山小僧を、仲間のようにかわいがありました。

常山小僧が来てからは、きこりたちは、仕事がおもしろく、思った以上にはかどりました。

「おい、常山小僧、仕事がよはかどるわい。これじゃ、うんと早めにこの山の仕事も

しまえる。ありがたいことだ」

やがて、仕事すべて終わったので、きこりたちは、早く山を下りてお金をもらって町に遊びに行きたくなりました。そこで、荷物を片づけると、大いそぎで、どんだん山を下りて行きました。

山をだいぶん下りたところで、

「おい、待つてくれ。おれを忘れたか。待つてくれ」と、後ろからだれかがよびました。きこりたち四人は、

「はて、だれだろう。だれもいるはずはないが」と思ってふりかえってみると、山小屋に残しておいたはずの、常山小僧が、どんだん追いかけて来ていました。びっくりしたきこりたちは、恐ろしくて、後も見ずに、いっしんに町に逃げて行ったということです。

村上郁再話

資料『半ぴのげな話』比江島重孝編／未来社